

被災地の看護師・介護士たち

全国訪問看護事業協会事務局次長／健和会・看護介護政策研究所所長 宮崎 和加子

宮城県石巻市の被災した訪問看護ステーションに支援物資を届けたときの話。石巻市医師会の建物は1階部分が浸水しその後処理が

まだまだ続いていた。その2階の相談室を間借りして再建に向け動きはじめていた石巻市医師会立訪問看護ステーション。海辺にあった事務所はカルテをはじめほとんどすべてのものを喪失してしまっ

た。管理者の阿部朋美さんが出迎えてくださった。

「全国訪問看護事業協会の宮崎です。たいへんでしたね」

「ええっ、あの宮崎さんですか！ 私いつも宮崎さんのブログを読んでるんです。まあ、直に会えるとは……。全部なくなってしまうました。何から始めればいい

のか……。」といいながら、地震・津波の時のようすを話してくださった。

3人の人工呼吸器の人

「地震直後は、まずは利用者さんの安否確認のために訪問しました。電話は通じなく、車は流されたし、道路も瓦礫だらけだったので足で歩いてです。停電だったので3人の人工呼吸器装着の人が最優先でした」

主な内容は次の通り。

一人目のAさん（20歳）は、停電・非常時の対策をご家族がきちんと理解していて、地震の最中から救急隊に連絡して一番につながり病院に入院できた。ご家族のすばらしい判断力・行動力である。

自動車のバッテリーで

5時間人工呼吸器を動かした

二人目のBさん（67歳）は、自動車のエンジンと発電バッテリーをうまくつなぐ方法で緊急対応ができた。Bさんの息子さん緊急対策として自動車のエンジンと発電バッテリーの組み合わせの方法を熟知していた。ところが、その日は息子さんが不在だったのでだめかと思っていたが、地震後にガソリンを満タンにして息さんが車で帰宅。津波にはあわなかったのでもいつものベッドに寝たまま、長いコードで繋いだ電源からの電気で人工呼吸器は動いた。自動車のガソリンがなくなりかけてきた明け方に救助され病院に一時入院した。「スゴイですね」

家族が交代で一晩中

人工呼吸器をして、助かった！

「もっとスゴイのはね。津波に流され、アンビュー（手動の人工呼吸の道具）まで流されてしまった方がいたんです。もちろん、停電で電気は使えないから普通はそこでおしまいですがね。ところがご家族が交代で、気管切開（喉のところに穴が開いて直接気管に管を挿入している）のところに口で息を吹き込んで人工呼吸したんですよ。『マウスにマウス』ではなく、『マウスに気管』だわね。それで一命を取り留めたのよ」と興奮気味に語ってくださいました。

「ええっ！ スゴイ！ ……」。まさに全身に電気が走る衝撃でした。

その三人目のCさんは、94歳のALSの女性。娘さん二人とご主人の4人家族。地震後、津波が来るだろうと考えている間に波が来てしまったが、濡れながら何とか家族みんなで2階に移動できた。しかし、人工呼吸器は使いものにならなくなり、アンビユーも行方不明。もうだめかと思ったが、娘さんたちが交代で自分の口でCさんの気管切開部に息を吹き込んで人工呼吸を行った。無我夢中で続けながらアンビユーを探している時、波に浮いているのを発見。暗くなる前には『マウスto気管』からアンビユーに切り替えることができた。

しかし電気は回復せず、しばらく救助もなかった。そしてやっと3日目に救助され入院。ということは、家族は3日間アンビユーを押し続けたのだ！
「すごいね！でも呼吸を肺に吹き込み続けて身体は大丈夫だったの」
「そうなんです。救助されたときは命が危ない状態だったんです。だけど入院して回復し、無事に家に退院しました。家といつても元の家には住めないで別の場所に住んでいます。それにしても、ご家族の力はスゴイです」
本当にすごい！人間の生命力も。



阿部さん（左）と筆者。下は、津波にあい泥まみれになったお札のどろを除去しているところ（石巻市医師会立訪問看護ステーションにて）。

停電が命に直結

停電で命に直結する可能性があるのが、①人工呼吸器利用者、②在宅酸素療法の人、③痰の吸引をしなければならぬ人。

電気を使用する器械を使う在宅での生活を始めるときには、故障や停電など緊急時の対策を必ず整えるようになっていく。しかし、慌てたり、備品が見当たらないかたたりして、うまくできるかどうかは不確かな場合が多い。

今回の大震災での大きな教訓の一つは、長時間の停電や、また救急車が利用できないことを想定して、形ばかりの緊急対策ではなく、確実に実施できるよう、対策を取っておくことである。

電気を使わない吸引方法

広範囲で停電した今回の地震、あるいは計画停電により各地の訪問看護ステーションからの問い合わせの中で重要だったのは、吸引器のこと。痰の吸引が一日数回から数十回必要な方が在宅で暮らしている。電動ではない吸引器の販

売先の紹介依頼などだった。

電動吸引器が動かなくなったりきに備えて、きちんとモノと手技の準備しておく必要がある。手動式・足踏式の吸引器や注射器を使った吸引などである。

自分の力で痰を出せない方の吸引器の故障は、停電時の恐怖そのものだと思う。

エアマット

命に直結しないが停電で困った事態は、エアマット（床ずれ対策の器具で、電気で定期的な空気が移動して体圧調整するマットレス）のトラブルだった。これは避難所などでもあちこちで聞いた。エアマットが起動しなくて空気が抜けてしまい、硬い床などに直接寝ることになり、床ずれが発生したり悪化したりしてしまったということがある。停電してもすぐに空気が抜けないようにする方法を家族に習得していただくことや、エアマットを使用しないで除圧できるグッズやマットレスなどの紹介なども必要だろう。